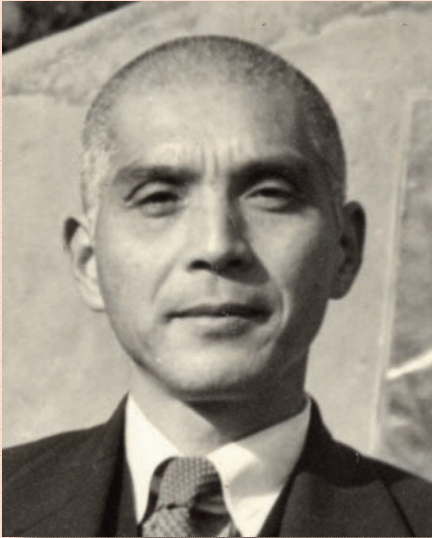


短歌・評論

おがわろう
小川五郎

山口市
(1902～1969)



【著作】

『国木田独歩と山口』（昭和15）
歌集『春蘭』（小川博子との共著・昭和44）
『防長文化史雑考』（昭和45・小川五郎先生遺文集刊行会）ほか

【閲覧情報】

中原中也記念館 ☎083―932―6430
山口県文書館 ☎083―924―2116

（文・小川 信）

小川五郎は明治三十五年（一九〇二）、現在の山口市湯田温泉四丁目に生まれる。
地元山口中学校に入学した頃から短歌を始め、田村盛一の指導を仰ぎ「木霊詩社」に加わる。以来防長新聞歌壇の常連となるとともに県内の短歌誌『白梅』『あけぼの』『常盤樹』などに参加し、積極的な作歌活動を行う。

山口中学五年生の時作詞した山中優勝歌「銀燭ゆらぐ」は今なお唱いつがれている。また、この頃橋田東聲の「霸王樹」社に加盟し、本格的に短歌の道に入る。山口中学卒業後、山口高等学校に入学、山高短歌会を結成。京都大学在学中には花田比露思を指導者として「京都大学短歌会」を起こし世話人の中心となる。

大学を卒業した彼は母校山口高校の教師として故郷に帰り、短歌を中心とした文芸活動を進め、昭和八年（一九三三）に山口歌壇の合同を図り、田村盛一、友廣保一、中野三郎、池部鴻、山根芳一、竹内八郎、津崎皓、吉本万二郎等と協力し、歌誌『水可美』（昭和十五年（一九四〇）九月終刊）を創刊し、編集にあたる。昭和十四年（一九三九）九月第七巻九号までは毎月欠かさず発行し、山口県下の短歌活動をリードし、多くの有望歌人を育てあげたことは山口県歌壇史上の偉業といえる。

以後文芸活動を中止し、戦後は安下庄中学（後高等学校）小野田、豊浦高等学校の校長を歴任し、更に宇部高等専門学校教授として教育に専念する。この時期、彼は短歌を中心に文学史研究を進め、山口県短歌史の体系化に専念し、「防長秀歌選」「山口県名歌選」をはじめ多くの研究成果を発表している。また昭和初期から国木田独歩研究を進め、新資料の発見発表、独歩全集刊行に協力。

一方、彼の専門分野である考古学では、美濃が浜、岩田、土井ヶ浜遺跡をはじめ県下各地の遺跡調査に参加。このほか地方史研究に積極的に取り組み、山口県地方史の発展に貢献した。

病床に伏した彼が自ら選び、この世に残した唯一の歌集『春蘭』の完成を見ぬまゝ、昭和四十四年（一九六九）晩秋に死去。生まれ故郷を一望する墓に夫婦一緒に眠る。

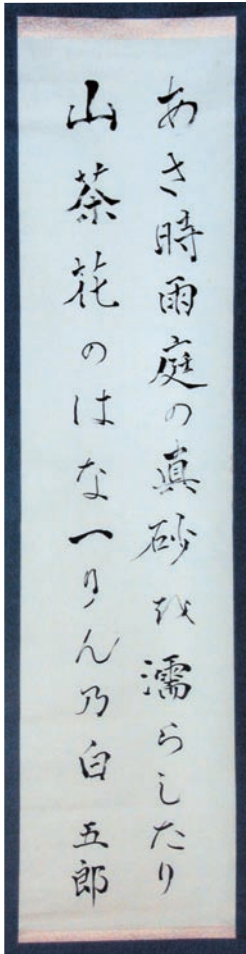
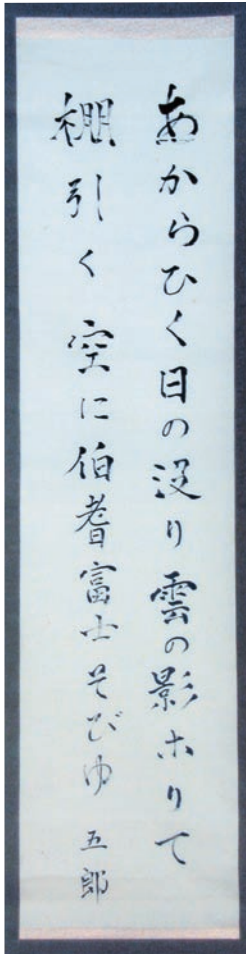


水可美同人吟行

銀燭ゆらぐ春の夜に
友よ感謝の美酒を酌み
月影淡き朧夜の
桜吹雪の舞ふ野辺に
若き血潮の潮鳴りに
勝ちどき高く和せんかな

（山口中学校・現山口高等学校優勝歌第一号）

小川五郎自筆の短歌



小川五郎 年譜

（提供・小川 信）

明治35（一九〇二）年		7月12日、山口県吉敷郡下宇野令村湯田（現・山口市湯田）に生まれる。	昭和36（一九六二）年	五九歳
明治41（一九〇八）年	六歳	一家破産のため父子別居。祖父母に養育される。	昭和37（一九六二）年	六〇歳
明治42（一九〇九）年	七歳	下宇野令村立湯田小学校に入学。	昭和39（一九六四）年	六二歳
明治44（一九一〇）年	九歳	山口町立今道小学校に転校。	昭和41（一九六六）年	六四歳
大正4（一九一五）年	一三歳	今道小学校尋常科卒業。この頃初めて短歌を始める。	昭和44（一九六九）年	六七歳
大正6（一九一七）年	一五歳	今道小学校高等科卒業。県立山口中学校に入学する。		
大正7（一九一八）年	一六歳	田村盛一を知り、短歌の指導を仰ぎ、「木霊」詩社に加盟する。また防長新聞に短歌を投稿し、石川香村と相知る。		
大正10（一九二一）年	一九歳	山口中学弁論部長として活躍し、野球部のために優勝歌「銀燭ゆらぐ」をつくる。部員に中原中也が在籍。		
大正11（一九二二）年	二〇歳	山口中学校卒業。阿武郡篠生村篠生小学校代用教員となり、氏原大作を知り交友。「霸王樹」社に加盟し、橋田東声に師事する。	《没後》 昭和45（一九七〇）年	

大正12（一九二三）年

二二歳

大正14（一九二五）年
大正15（一九二六）年

二三歳
二四歳

昭和4（一九二九）年

二七歳

昭和8（一九三三）年

三一歳

昭和10（一九三五）年

三三歳

昭和21（一九四六）年

四四歳

昭和24（一九四九）年

四七歳

昭和26（一九五二）年

四九歳

昭和28（一九五三）年

五一歳

昭和30（一九五五）年

五三歳

昭和34（一九五九）年

五七歳

昭和36（一九六二）年

五九歳

昭和37（一九六二）年

六〇歳

昭和39（一九六四）年

六二歳

昭和41（一九六六）年

六四歳

昭和44（一九六九）年

六七歳

『白梅』の大田哀歌鳥、弘中晴恵と相知り、同人となる。山口高等学校文科に入学。文芸部委員となり、山高短歌会を結成。また文化研究会を設立し、山高郷土史研究会を組織し、考古学研究に専念する。山根芳一の『あけぼの』に協力し、通巻33号を発行する。

中野三郎、池部鴻が中心の「常盤樹」の創刊発行に協力。京都帝国大学文学部史学科に入学、考古学を専攻。京大短歌会を組織し、花田比露思の指導を受ける。山口高校講師に就く。

田村盛一、友廣保一、中野三郎、池部鴻、山根芳一、竹内八郎、津崎皓、吉本万二郎などと発起協力し、山口県歌壇の合同を呼びかけ、綜合歌誌『水可美』を創刊。『山口県教育』の歌壇の選者となり、昭和17年まで続く。また同誌に「短歌初学」を昭和12年4月まで9回にわたって著す。山口高等学校教授に就く。

山口県立安下庄中学校（後高校）校長に就任。山口県立小野田高等学校校長就任。『防長短歌三十年史』を発表。昭和29年に「同史（続）」を発表。

「中原中也の歌」を発表。山口県立豊浦高等学校校長就任。『あつち以前』『大楽源太郎の歌』『西田直養と長府歌壇』を発表。

「吉田常夏氏の思い出」「若山牧水と山口」を発表。『防長秀歌選』を発表。昭和38年「続防長秀歌選」を発表。

豊浦高等学校校長を退任。宇部高等専門学校教授に就任。『拾遺防長秀歌選』『山口県名歌選』を発表。翌年「後拾遺防長秀歌選」を発表。

「木村豊平拾遺和歌集」「吉井勇と山口」を発表。11月27日、胃ガンのため、宇部市内の病院で死去。死の直前、田村盛一、友廣保一の協力を得て歌集『春蘭』を編集刊行。郷里山口市湯田朝倉の大林寺に博子夫人とともに眠る。

小川五郎遺文集『防長文化史雑考』が友人、門下生らにより刊行。